

# 山大聖火リレー

山形大学で学んだこと、過ごした日々、  
それらはやがてさまざまな成果となって、社会に燦々と火を灯す。  
現役山大学生やOBたちが各方面で活躍する姿を追った。



1 山形放送のテレビスタジオ、夕方の人気番組のセットをバックに。技術畑の社長の下で地上デジタル放送への移行に向け、機材の導入等も速やかに行われた。



2



3

2 勉強、アルバイト、バンド活動と忙しいながらも剣道にも精進した学生時代。東北地区剣道大会で優勝した際の記念写真。後列の右から5人目が園部さん。

3 園部さんの原点は、やはり技術系。大学では工学部の電気工学科を専攻。そこで学んだ知識や技術、理論的思考がテレビ局の現場においても十分に生かされた。

## 技術がわかることが強味になる、自信になる。 有言実行で放送局の代表という新境地で輝く。

**園部 稔** 山形放送株式会社 代表取締役社長

「下宿代は家庭教師、飲み代はバンドで稼いでいましたね」と米沢で過ごした学生時代を懐かしく振り返るのは、山形放送の園部稔社長。子どもの頃から理科系が好きで、鉱石ラジオを自分で作るなどしていたという園部さんは、ごく自然に進学先として工学部を選んだ。学生時代は、学業もさることながら、バンド活動や剣道等多方面で活躍し、青春を謳歌した。ちょうどその頃、テレビの映像はモノクロからカラーへ。放送技術の進歩がめざましいことに注目し、これは面白い分野だと考えテレビ局への入社を決めた。

ずっと技術スタッフとして働いていたが、入社13年目にして突如、東京支社営業部への転勤を命じられた。当初は不安や不満でいっぱいだったが、持ち前の進取の気質と

大学時代に磨きかけた社交性によって次第に新しい職場に溶け込んだ。東京支社時代にさまざまな人脈を築くことができたからこそ、社長という道が開けたのだらうと分析する。東京支社に勤務して4年経った頃、システムのコンピュータ化に伴い、営業も技術もわかる人材が必要との要請を受けて本社に戻り、技術系営業マンとしての本領を發揮。その後は、制作、編成、総務等さまざまな部署を経験し、現在に至っている。

工学部出身者が放送局の社長を務めているケースは希だというのが、園部さんは「技術がわかることの強味」を強調する。確かに、システムのコンピュータ化の時しかり、そして、地上デジタル放送への移行に取り組まなければならなかった近年の状況しかり、園部さんは技術人としてのキャリアを

生かしてその時々をリード。技術がわかることの強味を実証してきた。同じく工学部に学ぶ後輩諸君に向けては「自信を持って自分の思っていることをどんどん発言して欲しい。たとえそれが失敗したとしても、やって失敗したことは決してマイナス評価にはならない。何も言わない、何もやらないのが一番よくない」とアドバイス。さらに、自らの座右の銘とも言える好きな言葉として、鬼一法眼の「送去者、迎來者、和対者。一九の十、二八の十、五五の十。細入微塵、大絶方処、活殺自在」を紹介してくれた。少々長く難解な言葉ではあるが、これを読み解くことで大先輩からのより深いメッセージを受け取ることができる。迷った時、悩んだ時、ひとつの指針となってくれることだろう。

有言の成果